

青葉山エリアに関する市民シンポジウムについて

1 実施概要

日時：令和4年9月25日（日）午後1時半～午後3時半

場所：仙台国際センター

参加者数：約200名

2 パネリストからの話題提供、ディスカッションでのご意見（要旨）

木村浩二氏（宮城学院女子大学 非常勤講師）

- ・ 1600年に伊達政宗が仙台城縄張り始めの儀を行い、漢詩の一節を取り「千代」を「仙台」とした。これが仙台市のスタートと言える。
- ・ 大手門は原位置が特定できれば、その復元の実現性は高くなる。
- ・ 政宗ビューは、これから仙台のまちのセールスポイントにしてほしい。
- ・ 青葉山エリアの将来像を考えるうえで重要な視点は、「市民は何を一番の自慢の種にしたいか」、自分の専門分野で言えば城のシンボルとして何が欲しいかだと思う。
- ・ 政宗公の没後400年の2036年までに、青葉山エリア全体を整備するときの歴史的なシンボルとして大手門をぜひ建ててもらいたい。

垣内恵美子氏（政策研究大学院大学 名誉教授）

- ・ 劇場建設後の経済効果は、新潟市を例にとると、観光消費とほぼ同じくらいである。劇場に客が訪れ、その副次的な効果で地元で経済効果をもたらしている。
- ・ まちのイメージという観点では、川崎市を例にとると、かつて「公害のまち」というイメージだった川崎市が、劇場によって若い世代の2人に1人が「音楽のまち」という認識になっている。
- ・ 劇場は、社会的便益という観点では、「将来世代に必要」、「地域の魅力を高める」など利用しない人にも大きな価値を与えている。
- ・ 青葉山エリアの将来像を考えるうえで重要なキーワードとして「上質な都市空間」を挙げたい。住んでいる人々がどう質を高めそれを楽しむかがポイント。
- ・ 青葉山エリアは歩きにくいところもある。拠点と拠点をつなぐ回遊ルートなどは地元の方から提案いただけるとよい。



パネリストの木村氏、垣内氏、藻谷氏

藻谷浩介氏（(株)日本総合研究所 主席研究員）

- ・ 青葉山は大都市の都心にある自然の展望台として最も傑出している。都心に隣接しており交通も至便。徒歩、るーぷる仙台、地下鉄ですぐ行くことができる。
- ・ 青葉山に必要なものは天守閣ではなく、ゆっくり休んで楽しめる空間。
- ・ 地元の方が楽しんでいる場所を観光客と一緒に楽しむのが今の時代の観光。地元の方が一度行ったら二度と行かないようなところは、観光地とは言えない。
- ・ 仙台には商業地区とお城の地区、2つの都心がある。これを市民が理解してアピールすることが重要。
- ・ 双子のうち商業地区の方はウォーカーブルだが、青葉山エリアは歩く人の目線で作りこまれてはならず歩きにくいのでそうした点を意識した方がよい。

榊原進氏（(特非)都市デザインワークス 代表理事）

- ・ 青葉山エリアと都心を比べると、青葉山エリアは標高差があって都心は緩やかである。青葉山エリアは官有の土地が多く、都心は民有、青葉山エリアは静・疎というイメージで都心は動・密。
- ・ 青葉山エリアと都心は双子のようにセットになっていて、お互いに補完し合う関係にあるのではないかと考えている。
- ・ このエリアで都市デザインワークスは、「せんだいセントラルパーク構想」として食・巡る・佇む・知る・集うといった5つの楽しみ方を提案してきた。広いグリーンパブリックスペースがあるエリアなので、いろいろな使い方をしていけると考えている。



ファシリテーターも務めていただいた榊原氏

3 参加者からの意見

シンポジウムでは、参加者の思い描く『「青葉山エリア」の将来像、新たな楽しみ方・過ごし方』などについて意見を収集し、質疑応答時に一部を紹介した。

【主な意見（要旨）】

- 仙台の美しい景色を楽しむために、地元の人が、日常の散策やリフレッシュに、特別な用事がなくても訪れる場所であってほしい。訪れることで、季節を感じたり、時を感じたり、いい一日を送れるような場所であってほしい。
- 川に関連するアクティビティがあり、文化、芸術を楽しむ場所があり、青葉山の景色も楽しめるカフェで休憩できるようなエリアであってほしい。
- 休日に、家や都心とは別の場所でリフレッシュできるエリアであってほしい。
- 多世代が1日ゆっくり過ごせる場所になってほしい。子どもが自然を学べる場所であってほしい。
- 市民や観光客が回遊し、リピーターとなるようなエリアであってほしい。
- 大学のキャンパスを散策コースの一つとして楽しみたい。学生を巻き込んだ取組みを期待したい。